

## 1918年のソヴェト農村(その6) ヴィヤトカ県での割当徴発(2)

著者	梶川 伸一
雑誌名	名城大学人文紀要
巻	32
号	2
ページ	23-38
発行年	1996-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9984">http://hdl.handle.net/2297/9984</a>

# 1918年のソヴェト農村（その6） ヴィヤトカ県での割当徴発（2）

梶 川 伸 一

## 1、食糧独裁の実施

17年収穫の550万ブードを含めて4年間の穀物1600万ブードが貯蔵されていると想定されたヴィヤトカ県は、穀物調達的重要な拠点となった。<sup>(1)</sup>「穀物遠征隊」隊長は、「わが情報によれば、ヴィヤトカ県はペトログラードにとって、一部はモスクワにとって真の救済となる充分大量の穀物をまだ供給できた」とその重要性を指摘した。<sup>(2)</sup>しかし、同県の状況は厳しく、6月はじめに県執行委員長は、危機的状況にある、県のいくつかの地域は飢餓寸前にあり、南部郡〔穀物生産郡〕はクラークが支配している、われわれは小ブル的大衆と闘うには無力であり、中央のプロレタリア独裁と食糧政策を実施するための拠点として役に立つ社会層がほとんどなく、貧農は無知で労働者の大部分はメンシェヴィキと右翼エスエルであるとして、ツェルーパーに支援を要請した。<sup>(3)</sup>このような厳しい現実の下で食糧独裁を断行しなければならなかった。

5月15日の県執行委会議で、県の食糧業務改善の措置が審議され、郡ソヴェトの完全な従属、郡食糧組織である県供給ソヴェトの任務の絶対的遂行などを定めた決議が採択された。<sup>(4)</sup>食糧独裁の布告の受け取り後、その原文は地方に発送され、地方紙に掲載された。次いで食糧人民委員部により出された指令を地方組織が遺漏なく遂行するため、それへの追加と解説の作成に取りかかった。その中で、特に穀物余剰の申告の形式が考察され、これら申告の交付と点検の手續き、余剰の算定とそれらの集荷所への配送手續き、徴収された穀物への決算の手續きが指示された。食糧独裁令の速やかで断固とした実施のために、県食糧委の管轄にある総員2000人の部隊が必要とされ、それらは県南部の穀物郡であるエラブガ、サラブル、マルムイジュ、ウルジュームに配置された。<sup>(5)</sup>次いで郡を統制するために五月一九日の県供給ソヴェト会議で、「郡の分離主義的行動を許し難いと認め、このため広範な権限を持つ特別全権を県のすべての生産諸郡に派遣する」ことが決議された。<sup>(6)</sup>

このように県中央では早々と食糧独裁の実施に向けての措置が採られたが、郡現地ではこの法制化は遅れた。

エラブガ郡ではようやく6月5日の郡農民大会で、食糧独裁令が採択され、その実施に直ちに着手することが決議された。<sup>(7)</sup>これを受け、6月21日づけで郡食糧委は、住民からの穀物余剰の申請を点検し、その情報を至急提出し、集荷所への発送に向けてあらゆる措置を採り、余剰の

申告を拒否する者を郡食糧委に通知し、穀物を没収するよう村委員会に命じ、この執行からの逸脱は革命時の法令により処罰されると通告した。<sup>(8)</sup>

さらにこれに続いて、エラブガ [郡] 供給ソヴェトから、食糧独裁令に準じて消費基準が次のように定められた。

この布告の受け取り後直ちに穀物のすべての余剰の登録を行い、その脱穀と1週間の期限での集荷所への引き渡しに直ちに着手し、穀物保有者には次に定められた基準で新しい収穫まで家族と家畜の扶養のために彼に要する穀物だけを残すよう、エラブガ郡のすべての郷、村執行委に義務づける。新収穫まで食い手一人当たり1カ月間穀類1プード：5月1日から新収穫まで役馬は月5プードずつ：大型有角家畜は畑への放牧まで、実際には5月1日を超えずに藁飼育の下で1日穀類4フントずつ：小型有角家畜は6月1日まで1日穀類1フントずつ。もし登録を行わず、定められた期間に穀物が搬出されなければ、この義務が課せられている全員が軍事革命裁判所に引き渡される。[・・] 生産郡と見なされたエラブガ郡であったが、「郡供給ソヴェトには毎日郡の飢えた市民が訪れ、穀物を求めている。ソヴェトには郡を充足するための穀物は現存していない」と間もなく言明されるようになり、「住民自身が穀物を隠匿するすべての者を指摘する」よう義務づけた条例が出された。<sup>(9)</sup>

このような郡の実状では食糧独裁の実施には強力な権力基盤が必要であったが、現地で命令を執行するはずの食糧参与会の構成は旧態依然であった。7月はじめのエラブガ郡の食糧活動に関する報告は、「郡での食糧活動は完全な組織解体の状態にある。食糧参与は最近選出されたが、未経験で、自分の郡に穀物を保持しようとする地方的動機で任務が行われている。高い価格で穀物購入の私的取引が行われている」と伝えた。郡の60%が飢えて苦しんでいるにもかかわらず、部隊は活動せず、食糧参与会は、焼きパンを交付せよとの提案を拒否し、その自由商業を認可し、そこでは馬乳酒の醸造が盛んに行われていた。指導官は「ここでは馬乳酒醸造が流行なので、巨大な貯蔵がその醸造に運ばれる」と報告した。<sup>(10)</sup> コミサルは、ブルジョワジーとの闘争で貧農の無力を訴えた。「彼らの中には1000プードの穀物余剰を持つようなブルジョワジーがいる。執行委は取り上げようと試みた。村団はそうはさせなかった。今度は武器を手にして向かった」。しかし、民衆が無知である限り、自力でクラークから穀物や土地を取り上げるのは不可能であった。<sup>(11)</sup>

食糧独裁の実施を妨げた最大の要因は、地方で顕著に認められた分離主義的傾向であった。<sup>(12)</sup> ヴィヤトカ県を例外とせずこの時期、各地で分離主義的傾向が見られたのは、おもに次の理由であった。

そもそも初期「ソヴェト体制」とは一定の自立的地域の運動体の集合であり、郷、村レベルではスホード全体集会がその意志決定をする場合が頻繁にあり、当然にもそのような場合には住民の地域的利害が反映された。<sup>(13)</sup> このような実態的側面だけでなく、このようなシステムが法的にも保証されていた。臨時政府時代には、自分の地域的特性を熟知し、「地元に着した」

人物が国家専売を現地で遂行できると想定され、現地食糧委での彼らの一定の自立的活動が保証され、奨励されていたが、飢餓が昂進するにつれ、そのような委員会は国家的利益より地域住民の利害を優先させる結果に終わった。<sup>(14)</sup>十月革命後は食糧組織を地方ソヴェトに統制する方針が採られたが、17年12月22日に内務人民委員部により作成された『ソヴェトの権利と義務に関する指令』では、「地方の権力組織である労働者、兵士、農民、バトラーク代表ソヴェトは、地方的性格の問題では完全に独立している」ことが唱われた。<sup>(15)</sup>そして、まさに食糧問題は「地方的性格の問題」であり、飢餓状況の農村では地域内の穀物確保が最優先課題であった。つまり「食糧分離主義」は合法的ソヴェト活動であった。

分離主義的傾向は様々な組織を通してヴィヤトカ県全体で認められた。5月30日には、ツェルーパーの名で県供給ソヴェトへ、「郡のすべての分離的行動について報告せよ。詳細な事実を記述せよ。それらに従属を強要する。分離的搬出に認可を与えないし、貴殿も与えてはならない」との電報が送られた。<sup>(16)</sup>

5月27日づけ食糧組織再編の布告にもかかわらず、ヴィヤトカ県では県ソヴェトによりコミサルは選出されなかった。このため、食糧人民委員部から県食糧コミサルとしてナウモフが派遣されたが、6月中は依然食糧活動の準備段階で、参与会に旧メンバーが留まっている状態が続いた。<sup>(17)</sup>サラプル郡は6月になっても食糧独裁の布告を受け取らず、ノリンスク郡は布告は受け取ったものの、充分な力を持っていなかったのをそれを実施することができなかった。この時期の活動は、ヴィヤトカ郡供給ソヴェトが20人の6武装部隊を編成し、郡内の生産郷に派遣したに留まった。<sup>(18)</sup>

そもそもヴィヤトカ県では、食糧組織を統轄すべき現地ソヴェト自体が分離的に活動していた。五月末にモスクワ市食糧委に、「ソヴェトはヴィヤトカ県では独自に活動している。国家や県ソヴェト大会で定められた県固定価格とも合致しない独自の郡固定価格を確定している。冬調達は自由価格で行われ、現在固定価格に移行するのは困難である」と、県での穀物調達の「無政府状態」が報告された。<sup>(19)</sup>

こうしたソヴェトの活動に食糧人民委員部は危惧を抱き、食糧人民委員部から内務人民委員部に6月18日づけで、「今年6月3日づけヴィヤトカ県イジェフスク郡〔実際には19年1月19日に、サラプル郡からイジェフスク郡とヴォトキンスク郡が分離された〕執行委からの、CHKを認めない人物がソヴェトに選出された旨の電報から判断し、かような否定的で許し難い現象がほかの地方でも起こりうるし、地方食糧組織はソヴェトの統制下で活動しなければならないので、これは必然的に国民の食糧業務に有害に反映されうることを配慮し、食糧人民委員部組織部は内務人民委員部官房に、ソヴェトの党派性、それらの組織性、活動能力、反抗的態度、その他を判断できるような、簡単な特徴付けをしたすべての郡・県ソヴェトの構成に関する情報を〔組織〕部まで通知するようお願いする」旨の文書が出された。<sup>(20)</sup>

当然にも調達活動は停滞し続けた。5月10日、「ペトログラードは異常な破滅的状态にある。

穀物はない。住民に残った馬鈴薯粉、乾パンが交付されている。赤色首都は飢餓で壊滅している。[・・]との、ペトログラードの食糧危機を訴えるレーニンとツルーパーの電報が届けられ、これを受け、県供給ソヴェトは、マルムイジュからの蕎麦碾割り2ヴァゴンをペトログラードに、同じく蕎麦碾割り1ヴァゴンをモスクワに、そのほか穀物とバターをペトログラードとモスクワに発送することを決議したが、<sup>(21)</sup>オロネツ県食糧委代表が、「ヴィヤトカ県での五月任務命令は、集荷所と穀物貯蔵の欠如、市場価格での郷、郡による穀物の分離的販売のために部分的にすら遂行することができない」と打電したように、全体として5月の任務命令はほとんど遂行されなかった。<sup>(22)</sup>

ヴィヤトカ県での穀物調達の困難の原因の一つは、穀物地帯の鉄道駅と埠頭からの遠距離にあった。県で調達が可能な穀物は駅や埠頭から150ヴェルスタも離れ、駅や埠頭近くの穀物は、既に調達されるかまたはかつぎ屋によって汲み出され、もっぱら未脱穀の形で小農民経営に分散された穀物が残っているだけであった。したがって、穀物の脱穀と駅や埠頭までの搬送は国家的固定価格よりはるかに高くつき、必然的に消費諸県の組織は、市場価格または、郡ソヴェト大会が定めた10-20ルーブリの地方固定価格により穀物を買付けていた。こうして、播種の終了とともに国家固定価格が復活されるや、穀物の搬出は完全に停止した。<sup>(23)</sup> 県食糧会議で北部郡の代表は、この現象を固定価格に対する自由価格の勝利と適格に表現した。<sup>(24)</sup>

依然として続く分離主義の克服の唯一の手段は中央からの部隊の派遣であった。

穀物の著しい貯蔵が確認されていたサラプル郡では、5月20日から6月20日までに郡供給ソヴェトはまったく活動を停止した。その権能と活動に、現地ソヴェト、統制委員会、経済会議など様々な組織が絡み合っていた。供給ソヴェトの内部組織は解体され、食糧業務の経験ある活動家が欠けていた。かつぎ屋は穀物地方に押しかけ、武装組織は勝手に振る舞い、穀物専売と固定価格を侵犯していた。食糧秩序、穀物専売の強化に向けての緊急の精力的措置が採られ、食糧コミサルが選出された。270人の模範部隊が到着し、プード当たり30ルーブリの自由価格で買付を行っていた勝手な武装組織との闘争への断固とした措置が採られ、武装解除のため300人の食糧部隊が急ぎ派遣された。<sup>(25)</sup> このような措置にもかかわらず、現地食糧組織は、穀物専売の国家的任務を遂行することができないと、7月に報告されたような実状であった。<sup>(26)</sup>

県食糧コミサルの報告では、巨大な穀物貯蔵があり、そのためかつぎ屋による穀物の搬出が膨大になっていたエラブガ郡では、部隊に対する農民とかつぎ屋の抵抗は強かった。派遣された部隊350人は一部はかつぎ屋との闘争に、一部は穀物の徴収に配置され、6月20日から1カ月間で1万プードの穀物が徴収され、次いで別の2郷に移り、ここで1万4000プードの穀物が徴収され、これら郷で4万プードの穀物が登録された。ほぼ2週間で郷の徴収は終了したが、経験豊かな活動家が不足し、職権濫用が行われ、活動は奮わなかった。<sup>(27)</sup> 食糧組織が分離主義的傾向を帯び、かつぎ屋が猖獗し、国家固定価格が事実上廃止され、商品交換も充分に組織されず、農民が穀物の徴収に抵抗するような状況下では、当然のことながら武装部隊が積極的に投

入され、食糧人民委員部から多くの指導官 *инструктор* が派遣された。

指導官とは、活動基盤が脆弱な地方食糧組織に、適正な組織化のため食糧人民委員部から派遣される食糧活動家で、中央と地方の食糧組織の結節環と位置づけられ、地方食糧組織には従属しなかった。7月はじめにツルーパーは、サマラ県食糧委はノヴォウゼンスク、ニコラエフスク郡で中央の穀物調達に武装して抵抗し、指導官の活動を妨害している事実を非難し、食糧人民委員部の指導官と代表への介入は、「わたしへの積極的抵抗と見なし、県食糧委の責任を問い、責任者を革命裁判所に引き渡す根拠となることを警告」したように、指導官は中央権力の体现者であった。<sup>(28)</sup> 18年夏にはこれら指導官が、ヴォログダ、ウスチ=ドヴィンスク、クルスク、トゥーラ、チェルニゴフ、イヴァノヴォ=ヴォズネセンスク、サラトフ、タムボフ、ペンザ、ヴォロネジ、ヴィヤトカの県と地区に多数派遣された。<sup>(29)</sup>

食糧人民委員部はこうして県食糧委を超越した食糧独裁体制を整えた。

そして、中央から食糧部隊や活動家が派遣されるにつれ、穀物調達をめぐる武力衝突が頻発するようになった。マルムイジュ郡には100万プードの余剰が算定されていたが、すでに6月までにかつぎ屋により30万プードが搬出されたと報告があった。3人の犠牲者を出しながらも、部隊により1500プードの穀物が調達されたツイピインスカヤ郷では、6月9日に穀物の徴発の際に赤軍と「クラーク」の間で衝突が生じ、翌日マルムイジュ郡と市に戒厳令が出された。部隊の増援により11日にこの反乱は鎮圧されたが、不安定な状態が続き戒厳令は継続された。<sup>(30)</sup>

6月11日の県供給ソヴェトにおける食糧人民委員部指導官との合同会議でマルムイジュ郡への部隊の派遣が審議された。県供給ソヴェト議長補佐は、農民が武装食糧部隊を放逐し、買付委員会のエイジェントを殺害し、県供給ソヴェト代表は逃亡を余儀なくされた同郡に、このような悪を他郡におよぼさないようにするため、武装部隊の派遣を主張した。会議は、6丁の機関銃を持つ総員400人の部隊をマルムイジュ市に派遣することを決議した。また穀物の徴収のためにウルジューム郡に3丁の機関銃を持つ170人の武装労働者部隊も派遣されることになった。郡毎に指導官が部隊とともに送り出され、穀物調達が強化されるようになった。<sup>(31)</sup>

中央からの梃子入れにより調達が強化されるとともに、マルムイジュ郡での農民の抵抗は強まり、ツイニエ村での穀物の徴収は犠牲者をともなった。クラスノヤルスクからの2人の買付委員会のメンバーが殺害された。双方に負傷者が出た。現地のブルジョワジーは組織的に武装されている、と県食糧コミサールは6月末に打電した。<sup>(32)</sup>

6月に生産諸郡に派遣された食糧軍の成果も散々であった。ヴィヤトカ県に派遣された部隊の状況について、食糧人民委員部は次のような報告書を受け取った。

貴殿によって送られた部隊が今晚到着した。状態は余りよくない。ホリニツキイ工場で、飢餓のための自殺の噂がある。ヴィヤトカ郡で2件の餓死がある。県の南部諸郡での未脱穀の穀物貯蔵は数百万プードと算定されている。県供給会議は、積極的な活動家の欠如のために、状況を救済するための十分な精力を発揮していない。このほか、穀物の汲み出しのために依拠す

ることができるであろう軍事力がまったくない。エラブガで215人のペルミの赤軍部隊が活動し、活動は順調に進んでいるのだが、これは非常に少人数である。力が必要である。指導者が要求される。というのは、食糧コミサールだけでなく、軍事コミサール、その他の分野でも、活動家の当座の構成の下では、われわれは食糧独裁の政策を実施するのにほとんど無力である。

[・・]<sup>(33)</sup>

事実、エラブガ、サラプル、ヤランスク郡で分散して活動する個々の部隊は農民により撃破された。エラブガ郡では30人の部隊が撃破され、死者と負傷者が出た。<sup>(34)</sup>

ヴィヤトカ県での穀物調達の強化と食糧独裁の実施のために多数の軍事力が要請され、こうしてその後、ヴィヤトカ県には大量の食糧部隊が派遣されることになった。すでに6月までの1週間でモスクワでは2284人の食糧部隊が編成され、そのうち最大人数の367人がヴィヤトカ県に送られた。<sup>(35)</sup>

食糧部隊代表者会議は、食糧独裁の任務を実行し、「われわれの目的は全ロシア的規模 [で] 飢えた者を賄うことであり食糧崩壊が根絶されるまで執拗に闘争を行い、ヴィヤトカ県へ5000人の部隊の召集を決議するよう要請する。9月までにそこで穀物400万プードを集める。1週間で10万プード以上が徴収された [・・]」と、第5回全ロシア・ソヴェト大会に報告した。<sup>(36)</sup>

(1) Изв. Наркомпрод. 1919, №1/2, с. 18.

(2) Изв. Наркомпрод. 1918, №8, с. 31.

(3) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 245, Л. 27.

(4) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 496–497

(5) Вятское нар. хоз–во. 1918, №1/2, с. 19.

(6) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 498.

(7) Изв. Наркомпрод. 1918, №6/7, с. 18.

(8) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 145.

(9) Там же. ЛЛ. 146–146об.

(10) Там же. ЛЛ. 286, 692. 現地からは飢餓が伝えられた同郡であったが、中央から派遣された指導官はここでの十分な穀物貯蔵を確認した。供給ソヴェトによれば都市の需要は3万5000プードで1万5000プードの搬出を必要と見たが、指導官によれば「黒ずんだ藁から判断して、5–6年以上も経った藁山があり」旧年来の未脱穀の20万プードの余剰があった(там же. Л. 693.)。

(11) Беднота. 29 мая 1918.

(12) モスクワ州食糧委は、再三の指摘にもかかわらず中央権力により定められた固定価格より高く穀物生産物を買付けているエラブガの州エイジェントを非難する訓令を5月27日に通告した(Изв. Наркомпрод. 1919, №6/7, с. 18–19.)。

(13) 旧ソ連の研究者は一致して、18年春にはソヴェト選挙はまだ階級的制限がなく、全住民によってソヴェト選挙が実施されていたと指摘する(См.: Губарева В.М. Развертывание социалистической революции в деревне в 1918 году. Л., 1957, с. 38.)。

(14) Орлов Н. Продовольственная работа Советской власти. с. 14.

- 15) Вестник отдела местного управления НКВД. 1918, №1, с. 3.
- 16) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 31об. このような郡供給ソヴェトの活動は、県供給ソヴェトに派遣された指導官により、郡供給ソヴェトは独立した食糧組織でなく、様々な組織が入り込み、穀物調達を行う状態ではなく、「飢餓諸県からの穀物調達に関する全権と代表は、穀物専売と固定価格を維持することなく独自に調達を行おうとし、穀物専売と食糧の計画的任務命令の遂行に向けてのあらゆる原則を根本的に損なっている」と非難された (там же. Л. 157.)。
- 17) Изв. Наркомпрод. 1918, №10/11, с. 27.
- 18) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 245, ЛЛ. 34–36.
- 19) Изв. Наркомпрод. 1918, №6/7, с. 19.
- 20) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 52.
- 21) Зубарева Л.А. Хлеб Прикамья. с. 15; Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 491–492.
- 22) Изв. Наркомпрод. 1918, №6/7, с. 23.
- 23) Изв. Наркомпрод. 1918, №8, с. 17.
- 24) Вятское нар. хоз-во. 1918, №4/5, с. 8.
- 25) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 84. Сарапул郡の現地組織をこのように非難した指導官モイセーエンコに対して、「専売固定価格の布告に関連し食糧問題が審議されている。大会の雰囲気は、大部分がブルジョワの傾向の、狭い視野である。布告の実施はすべてが円滑にいかないかもしれない。これを根本から中央からのコミサルである指導官モイセーエンコが妨げている。まったく自らの任務に応えず、国家の利益を守ることができない人物である。彼のすべての活動は、無益で、不必要で、問題からかけ離れた熱弁だけに表現され、彼の発意と彼の個人的合意で成人も赤ん坊も各食い手当たり穀物3ブードの消費基準が定められ、同様に家畜の基準も増やされた。その結果、サラпул郡はほとんど余剰を出すことができない。[・・]」と報告された (там же. ЛЛ. 134–134об.)。
- 26) Там же. Оп. 1, Д. 245, Л. 39.
- 27) Там же. Д. 126, Л. 153; Оп. 3, Д. 160, Л. 693об.
- 28) Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 27.
- 29) Изв. Наркомпрод. 1918, №20/21, с. 10–11. ただし、これら指導官が質量ともに充分であったかは別問題である。トゥーラ県の指導官は、エフレモフ郡の27郷には指導官はまったくいない、ほとんどの指導官は個人的印象だけで穀物を目分量して、あちこちの村に課税していると報告している (Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 41–42.)。
- 30) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 505, 511–612.
- 31) Там же. с. 513–514; РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 92.
- 32) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 126, Л. 153.
- 33) Там же. Л. 65.
- 34) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 520.
- 35) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 126, Л. 53.
- 36) ГАРФ. Ф. 1235, Оп. 93, Д. 17, Л. 52.



## 2, ヴィヤトカ県での部隊の活動

北部諸県を賄わなければならない特別な重要性を持つと認定されたヴィヤトカ県に、<sup>(1)</sup>食糧部隊が集中され、6月中に1415人、7月中には2500人の食糧部隊が派遣された。<sup>(2)</sup>だが、県の食糧機関は分離主義的傾向を強め、県食糧委には2000人あまりの部隊があったが、県の食糧業務は危機的状況にあり、<sup>(3)</sup>5月半まで1フントの穀物も県で調達できなかった。徴収部隊の一部は被害を蒙り、140人からなる部隊が撃破され、組織された農民から夜陰に乗じて襲撃を受け全滅した。<sup>(4)</sup>6月はじめには、ウルジュームから、食糧独裁布告は武装力の適用によってのみ可能であり、以前に中央から派遣された部隊は任務に応えず、厳格に規律を守り、意識の高い部隊が必要であると食糧人民委員部に要請された。<sup>(5)</sup>

こうしてヴィボルグ地区、ネフスキー地区などの労働者からなる400人の第1ペトログラード模範食糧部隊は半コート、詰襟軍服、乗馬ズボン、編み上げ靴、ゲートル、軍帽、革帯、背囊、飯盒を支給され、6月2日にペトログラードからモスクワに向かい、ここで食糧人民委員部の管轄に入り、食糧軍管理部は6月4日にこれら部隊をヴィヤトカ県に派遣した。モスクワからも4部隊が6月4日に、翌日にはさらに200人の補充部隊の総勢1000人の第1モスクワ食糧連隊が送り出された。すべての部隊は連隊を編成し、郡毎に配属された。<sup>(6)</sup>県供給ソヴェトで県の食糧状態が検討され、それぞれの郡に食糧人民委員部指導官が部隊とともに派遣された。グローバはマルムイジュ郡、モイセーエンコはサラブル郡、マツェーリはウルジューム郡に送られ、マリヤローフはエラブガが指定されたがヴィヤトカに留まった。<sup>(7)</sup>

部隊はモスクワ食糧委に現地での状況を次のように報告した。「穀物郡に部隊が派遣された。部隊の出現とともに、穀物は速やかに穴や森に隠される。かつぎ屋を根絶することが決定された。現地住民と部隊との衝突の情報がしばしば入っている。毎日ベルミ鉄道だけで1万から1万5000プードの穀物がかつぎ屋により運び出されている」。<sup>(8)</sup>

各農戸平均300プードもの穀物貯蔵を持つと言われたウルジューム郡に送られたモスクワ部隊の状況は次のようであった。

6月12日にウルジュームに派遣されたマツェーリの指導の下で、3丁の機関銃を持つ40人の現地部隊は6月14日に郡に到着し、穀物の脱穀と徴収に取り掛かる中、6月23日に2門の大砲を持つモスクワ部隊が到着した。<sup>(9)</sup>6月26日、部隊参謀=ヴィヤトカ県食糧委全権からの電報によれば、同郡の食糧業務を指導し、固定価格を回復し、全余剰を直ちに徴収した。部隊の一部は脱穀と徴収に着手した。農民はこの間抵抗もせず、固定価格で穀物を供出する提案をしてきた。穀物と交換に織物、砂糖、その他の商品を即座に送付することが必要である。郡ソヴェト大会では、右派分子、クラーク層が支配的である。食糧問題は徴収部隊の到着のおかげで、中央の要求通り進んだ。7月2日、現地部隊により、6000 [プード] の穀物が徴収され、波止場に送られている。河川部隊はかつぎ屋から1万以上を徴収した。郷の集荷所には3000 [プード] が入っている。活動は初期段階にある。穀物の古い藁山の順調な脱穀が行われている。<sup>(10)</sup>

「布告に準じて、郡供給ソヴェトは郡食糧委に改変され、10箇所の集荷所と穀物の受領所を組織した。2万5000プード以上を調達した。任務命令は遂行されている」。指導官マツエーリはこのような報告を7月16日に組織化に関する活動が終了するまで、連日のように食糧人民委員部に打電した。<sup>(11)</sup>

ペトログラードの部隊はサラプル郡に送られ、6月21日に現地に到着した。

ここでの状態は次のようであった。現地のクラークは高い価格でかつぎ屋に穀物を販売していた。穀物を積載した長い帯状の荷馬車の列が汽船埠頭と鉄道駅まで続いた。ここで專業かつぎ屋と投機人が非常に大勢集まり、荷馬車の到着を待ちかまえ、時には武装力を誇示さえしていた。いくつかの部隊は彼らによって機関銃や多くのライフル銃と拳銃を奪われた。投機人は、一つの略取的活動により食糧業務の組織解体をもたらすほかに、農民にあらゆる愚にもつかぬ風聞を植え付け、彼らを食糧部隊にけしかけようとしている。<sup>(12)</sup>

現地に到着した部隊を見て、農民は驚愕し、これは「武装したかつぎ屋だ」、奴らはソヴェトを攻撃するなどの風聞が流れ、これら風聞は住民にパニックを引き起こし、部隊が出現するや、人々はバザールから四散し、商店は閉じられた。このため郡ソヴェト執行委は、「市民諸君！ペトログラードからのいわゆる「第1ペトログラード模範食糧部隊」の到着におびえるな。その目的は、いたるところでの商品と生産物の固定価格の確定、飢えた者に供給するためのクラークからの穀物の徴収と没収に向けての郷毎の巡回、非組織的かつぎ屋行為との闘争である」と住民に訴えるのを余儀なくされた。<sup>(13)</sup>

部隊はいくつかの小隊に分けられ、それらは郷毎に分遣された。[・・]農民たちはこう言っている。「おい、こっちに失業者がやって来て、穀物を脱穀するとよ」。中資産農民はそのように言うが、クラークは徴発を避ける目的で、できるだけ急ぎ穀物を他人に販売するためにあの手この手で苦心している。[・・]部隊にとって何より容易に大量に穀物を得ることができるのは埠頭と駅である。ここでは、投機の目的でそこに搬送される巨大な貯蔵を没収するだけである。3日間で、サラプル郡だけで約3万プードが没収された。この穀物は即座にもっとも飢えた諸県とペトログラードに送られた。[・・]<sup>(14)</sup>

ここで活動していた第1ペトログラード模範食糧部隊のコミサール補佐Π・メドヴェージェフは7月はじめに活動の進展を次のように報告した。

[・・]取り急ぎ、ヴィヤトカ県での穀物徴収に関する第1ペトログラード部隊の活動を報告する。[・・]6月21日にサラプル市に到着したわが目的は、まず地方〔食糧〕組織の状態を知ることであった。組織は脆弱であったが、ソヴェトは多少なりとも良好な状態であった。これをわれわれは速やかに知ることができた。さらにわが目的はかつぎ屋との闘争であった。彼らはここの各駅に幾千人もおり、われわれは3日間で彼らから約1万2000プードの穀物を徴収することに成功した。それ以後かつぎ屋はずっと少なくしか現れない。これら目的を完了し、われわれは現地ソヴェトの指示により、ヌイルガリンスカヤ郷の村に向かった。サラプルには

革命勢力はわずかなので、[部隊の]一部は支援のためここに留まった。郷に到着し、郷農民全体集会を召集し、そこでは勤労貧農が歓呼し、クラークと搾取者の怒りを買った。だが貧農はどこでも多く、活動は順調に進み、穀物は集配所に運搬されはじめている。<sup>(15)</sup>

サラプルからはモスクワへのペトログラード部隊による順調な穀物の発送が7月に報じられた。<sup>(16)</sup> 部隊の同郡での活動は穀物徴収だけに留まらなかった。食糧部隊により7月2日にサラプルで郡農民大会が召集され、食糧部隊の提案により郡固定価格が廃止され、国家固定価格が復活した。<sup>(17)</sup> マルムイジュ郡では7月までに現地部隊によりここで6000ブードの穀物が徴収され、埠頭に送られたが、<sup>(18)</sup> 中央からの部隊の派遣によりその量は飛躍的に増加した。7月17日に、マルムイジュから食糧部隊により同郡で10万ブードの穀物が集荷所に調達され、駅への搬送に向けて緊急措置が採られていると指導官は報告した。<sup>(19)</sup> ヴィヤトカ県でのこれら部隊の輝かしい成果が広く伝えられた。

しかしながら、公表されたウルジュームやサラプル、マルムイジュ郡以外の食糧部隊の成果は芳しくなかった。それに実際には、サラプル郡での第1ペトログラード部隊の活動も、喧伝されたほどには満足すべきものではなかった。

7月半ばにモスクワ食糧委エイジェントは、独自に商品交換を行う組織の代表とかつぎ屋により固定価格が侵犯され、汽船や鉄道での略奪的搬出は依然として続いていると、サラプルから食糧人民委員部に打電した。<sup>(20)</sup> それだけではない。7月3日に交通人民委員はツルーパーに、「アマトウイリ [シムビルスク県]、ルコヤノフ [ニジェゴロド県] 地区鉄道従業員によって、アマトウイリ・ソヴェトと合同で、ヴィヤトカ県サラプル駅で20ヴァゴンの量の穀物が買い付けられた。この穀物が第1ペトログラード食糧部隊により没収され、駅からいずことなく持ち去られた」として、部隊によって没収された穀物の返還を訴えるような不祥事も生じた。<sup>(21)</sup>

当然のように、部隊派遣の強化とともに、現地農民の抵抗は激しさを増した。9月の郡ソヴェト会議の報告によれば、ウルジューム郡で7月中に作戦行動をしていた食糧部隊は、貧農に損害を与え、現地住民の不满と抗議を引き起こした。<sup>(22)</sup> マルムイジュ郡で穀物の強制的収用のために流血の衝突が起こり、死傷者は多数と報じられた。<sup>(23)</sup> エラブガ郡でもスロボドスコイ郡でも部隊と農民との戦闘が生まれていた。<sup>(24)</sup> 6月末にヤランスク郡から次のような電報が送られた。

6月19日に、ヤランスク郡食糧委によって郡に穀物の脱穀のために派遣された民兵は、20[日]朝、セルデジュスカヤ郷の市民によって粉砕された。現地に100人の赤軍兵士部隊が差し向けられた。民兵の壊滅に、セルデジュスカヤ郷の大部分の住民とウルジューム郡の一部が参加した。激戦はひどいものであった。眠っている間に襲撃があった。この間6人の遺体が見つかり、食糧部隊長クラピーノフは銃殺された。多くの死者は記録されなかった。彼らの遺体を叛徒は土に隠した。重傷17人、軽傷40人。断固とした措置が採られた。懲罰部隊、機関銃の送付による支援を願う。事態は深刻。食糧業務が崩壊するかもしれない。ヤランスク市と郡に戒厳令が布告された。<sup>(25)</sup>

全県の規模で食糧部隊の活動は崩壊していた。7月1日、指導官グローバは、エラブガとヤランスク郡で、おびただしい食糧部隊が撃破され、これら部隊がばらばらで活動する間は同様な事が増大するであろうと伝えた。<sup>(26)</sup>7月をはじめで県食糧委の管轄に、闇食糧取締部隊として活動する230人の部隊を含めて、総員1730人の6部隊があったにもかかわらず、<sup>(27)</sup>これら部隊は半径500ヴェルスタの範囲で作戦行動を採り、いくつかの部隊は鉄道や水路から200ヴェルスタの距離にあり、参謀本部に統合されることもなく、相互に連携も統制もなしに活動していた。<sup>(28)</sup>

これと同時に、中央から派遣される部隊が増加するにつれ、部隊と現地の食糧機関との対立が現れはじめた。7月1日の県食糧委会議で県食糧コミサールは、エラブガ郡で食糧部隊長デニーソフは自分の権限でかつぎ屋に麦粉1ブードの搬出を認可し、中央の指示を考慮せず、自分の判断で任務命令を配分していると非難し、デニーソフに不法行為を直ちに停止し、食糧人民委員部と県食糧委の訓令を正確に遂行するよう命ずることが決議された。<sup>(29)</sup>7月11日に食糧人民委員部が受け取った電報では、「郡の食糧業務は完全な組織解体の状態にある。最近選出された食糧参与は未経験で、地元商人の言いなりで、彼らの任務は自分の郡に穀物を保持することである。高価格での穀物購入の私的取引が行われ、投機が奨励されている。[・・]食糧部隊長[食糧人民委員部全権]デニーソフと[県]食糧参与会との間で闘争が行われ、活動の協調性はない。住民に部隊への扇動がなされ、部隊への対応は敵対的。部隊の活動は弱く、全期間で1万5000ブードが徴収された。徴収された穀物は現地の飢えた住民に放出されている。食糧参与会の情報によれば、郡の60%は飢え、したがって、すべての余剰は現地住民に向けられる」と報告された。<sup>(30)</sup>

このような混乱のために7月1日までにヴィヤトカ県でわずか15万ブードの穀物を固定価格で買付けただけであった。<sup>(31)</sup>

中央政府はまず部隊の統合をはかった。食糧徴収軍本部委員会の訓令に準じて、単一の参謀本部にすべての作戦部隊を統合することがヴィヤトカ県に命じられた。<sup>(32)</sup>

6月13日に食糧連隊2個中隊を率いてマルムイジュ、ウルジューム郡に出発した食糧部隊政治コミサール、A・C・ホマークは、<sup>(33)</sup>6月29日にウルジュームから、活動に着手した、トゥレクに参謀本部を組織し、マルムイジュ、ウルジューム郡に700人の徴収部隊を送り、当面はもともと穀物が豊かな2郡を捕捉した、と打電した。<sup>(34)</sup>「穀物の受け取りの唯一の手段は武力的徴収」と見なされ、885人の第1モスクワ食糧連隊が徴収活動に着手し、その活動をウルジューム、マルムイジュ郡に集中した。<sup>(35)</sup>この地域で食糧活動を展開するために、ウルジューム付近のヴィヤトカ河畔に置かれたトゥレクの同連隊参謀本部の役割が強調され、「近い将来に組織センターとしてのトゥレクに残りの穀物2郡：エラブガとサラブルを統合するのは避けられない。この統合を早めるほど、新たな食糧政策の成果は速やかに現れる。現在すでにトゥレクから出される措置によってヴィヤトカ河沿いのかつぎ屋行為は10分の1に縮小した。郷への徴収は好都合な条件の下で浸透している：農民は抵抗なしに穀物を搬送している」と、ヴィヤトカ県内で活

動するすべての徴収部隊の活動の全権を第1モスクワ食糧連隊参謀部は要求した。<sup>(36)</sup>こうしてモスクワ食糧連隊の主導によりトゥレクにヴィヤトカ県のすべての食糧活動を統合する参謀本部を設置することが決定され、同参謀本部に政治、食糧、軍事作戦の3部が組織され、県の食糧活動がここに集中されることになった。

確かに単一の参謀本部は設置されたが、これにより中央からの部隊と現地食糧機関との亀裂は深まった。7月1日のヴィヤトカ県食糧委会議で、県内の食糧徴収部隊の参謀本部を組織する問題が審議され、中央からの代表は食糧徴収軍本部委の訓令に従って、部隊の分離主義的行動を回避するために、現地で組織された部隊、ならびにモスクワ、ペトログラードの消費諸県から到着する全食糧部隊を従属させる単一の参謀本部を提案した。だが同会議では、「県で活動するすべての食糧部隊のもっとも速やかな再編と、ヴィヤツキエ=ポリャヌイ埠頭でのそれらの指導のための単一参謀本部の設置を必要と認める」旨の決議が採択された。<sup>(37)</sup>県食糧委会議は、トゥレクより50キロほど下流にある、生産郡の中心に位置するヴィヤツキエ=ポリャヌイを参謀本部として主張したが、この決定を無視してトゥレクの参謀本部が決定されたのであった。

これ以後、県の食糧業務で中央と現地食糧機関との対立は収拾できないまでになった。7月1日の県食糧委会議で、中央から派遣された全権の1人は、すべての部隊の単一参謀本部への従属を訴えるとともに、部隊の中央から派遣された全権へ従属をも要求した。<sup>(38)</sup>

今度は、このような全権の到着に現地指導官は反発した。グローバは、食糧業務の指導者に県代表が入ることを要求し、中央からの「食糧独裁官」の派遣に反対を食糧人民委員部に表明した。<sup>(39)</sup>

全権ナターポフの要請により、中央からズスマノーヴィッチによって食糧活動家が派遣されたが、このためさらに事態は紛糾した。彼らは県食糧委の現地部隊に敵対的關係を採り、彼らを中傷する電報が現地から中央に送られた。<sup>(40)</sup>中央からの派遣部隊と現地との対立は決定的となった。ウルジューム郡にあったホマークの食糧部隊はすべてを略奪し、ポリシェヴィキからなる郡ソヴェトはテロを蒙り、組織された貧農はホマークとの戦闘を開始し、彼を召還しなければすべての郡で権力基盤が危うくなる恐れがあると、県軍事委は7月に食糧人民委員部に報告した。<sup>(41)</sup>7月13日の県食糧委会議で、部隊の狼藉についての噂を信じてはならないとのホマークの電報が読み上げられたが、ホマークに彼の食糧部隊で規律を確立すること、食糧部隊の状態を県食糧委に通報することが決議された。<sup>(42)</sup>現地の権力と派遣部隊の対立、派遣部隊内での統制の乱れと、県内の食糧活動は大混乱に陥り、その結果がシリーフチェルの到着であった。彼はヴィヤトカ県特別食糧コミサール（活動範囲にヴィヤトカ、ペルミ、ヴォログダ県を含んだ）として、7月20日に食糧人民委員部により派遣され、<sup>(43)</sup>7月26日に現地に到着した。<sup>(44)</sup>食糧人民委員代理ブリュハーノフは7月31日づけで特別全権シリーフチェルに、一時的措置として県食糧委に県内の任務命令を制限する権限を与え、それ以後ここでの調達活動は中央権力が掌握した。<sup>(45)</sup>

トゥレクの参謀本部の7月のほぼ3週間の活動で、集荷所が組織され、以前はマルムイジュ

郡でのように飲酒に耽っていたエイジェント、買付委が多少なりとも利用されるようになり、ウルジューム郡ではヴィヤトカ部隊により約4万プード、マルムイジュ郡ではモスクワ第1部隊により約10万プードが徴収された。<sup>(46)</sup>7月半ばの食糧人民委員部指導官の到着後、さらにマルムイジュ郡では17箇所の集荷所が組織され、郡食糧委が再編された。<sup>(47)</sup>7月16日づけで食糧連隊に、すべての作戦部隊は集荷所から穀物の搬送に直ちに着手し、妨害に対しては武器の適用にいたるもっとも厳格な措置を適用し、穀物の搬送の活動のために現地住民、馬、輸送手段の勤労働員を実施するようプリカースが出された。<sup>(48)</sup>さらに、7月15日に県食糧委に307人の部隊を派遣する旨の電報がモスクワから出され、7月25日に県食糧委の管轄に605人の第1モスクワ食糧連隊が到着し、派遣部隊がさらに増強された。<sup>(49)</sup>

ウルジューム郡では穀物脱穀のために勤労住民の2週間動員が実施され、各経営者に収穫から20プード以上の脱穀が義務づけられた。<sup>(50)</sup>7月末までにエラブガ郡でのデニーソフの下の350人の部隊により調達も順調に進み、1週間で2郷から穀物1万4000プードが徴収され、4万プードが登録された。<sup>(51)</sup>もちろん、農民の抵抗は続いた。軍事情勢を知らずに小隊に分けられ10ヴェルスタに渡って展開した280人のヴィヤトカ県食糧委部隊は数週間後にはわずか120人しか残らず、残りは死傷したために、8月になると同郡ではナターポフの指令により417人の部隊は密集体形で徴収活動を展開し、部分的衝突はあったものの2週間で12万プード以上を徴収した。<sup>(52)</sup>

7月23日のモスクワ・ソヴェト執行委会議で、この1か月半の食糧部隊の活動によりサラプリ郡で6万3000、マルムイジュ郡で20万、ウルジューム郡で1万、エラブガ郡で1万5000プードが、残りの郡で20万7716プードが調達されたことが報告され、この量はほかの穀物生産県をはるかに凌いでいた。<sup>(53)</sup>

サラプリ郡で調達された6万3000プードの穀物のほとんどがペトログラードとモスクワ宛てに発送された。しかしながら、発送された穀物は途中の飢餓諸県に止め置かれ、指定地に到達するのはわずかであった。その結果、この調達活動でペトログラードが受け取ったのは2万7000プードにしかすぎなかった。<sup>(54)</sup>

7月末のトゥレクからの報告では、食糧部隊は一定の成果を挙げ、マルムイジュ郡ではモスクワ部隊、ウルジューム郡ではヴィヤトカ部隊により穀物が徴収されたものの、部隊の活動は概ね不満足であることが分かった。農民の襲撃後、部隊の徴収活動はまったく停止した。<sup>(55)</sup>

8月のヤランスク郡での部隊の活動は次のようであった。

ヤランスク供給ソヴェトにより、このソヴェト・メンバーを長とする、20人の武装された赤軍兵士を含む、100人の労働者民兵が富裕農の藁山にある穀物の脱穀のためにセルデジュスカヤ郷に派遣された。この部隊はその日の晩までにこの郷に到着し、この地の執行委により最寄りのシャハイカ村落に差し向けられた。そこには50束の未脱穀の穀物があった。この村落で部隊は2-3人ずつが家に宿営し、朝に活動を開始しようと予定した。だが自分の穀物を心配するクラークはその夜のうちに最寄りのほかの村落から人々を呼び寄せ、早朝に、棍棒、鉄棒、

火器を持って寝ている民兵を襲撃した。このような卑劣な襲撃の結果、民兵のうちその場で6人が死亡、60人が重軽傷を負った。ヤランスク [郡] 執行委は、シャハイカ村での出来事の情報を受け取り、そこに武装部隊を送った。反革命反乱は鎮圧され、60人の叛徒が逮捕され、ヤランスク監獄に護送された。反乱に参加した22村に50万ルーブリのコントリビューツィア [懲罰的課税]<sup>(56)</sup> が課せられた。

最大規模の食糧部隊が派遣されたヴィヤトカ県の穀物調達にはシリーフチェルの到着までは完全な行き詰まり状態であった。現地食糧機関と中央派遣部隊との対立は深まり、部隊の狼藉も頻発し、その一部は反乱部隊に転化した。農民の抵抗は日毎に強まり、穀物の集荷は停滞した。ここに到着したシリーフチェル遠征隊は新しい調達方法として、村団との契約による割当徴発をヴィヤトカ県で最初に適用したのであった。

(1) Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 43.

(2) Беркевич А. Петроградские рабочие в борьбе за хлеб. с. 84.

(3) Изв. Наркомпрод. 1918, №16/17, с. 44. 同県の郡執行委は比較的左翼エスエルの影響力が強く、7月半ばで、グラゾフではコムニスト7人、左翼エスエル7人、マクシマリスト1人、オルロフではコムニスト18人、左翼エスエル10人、不明4人、コテリニチではコムニストとシンパ8人、左翼エスエルとシンパ27人、マクシマリスト2人、無党派5人、ノリンスクではボリシェヴィキとシンパ14人、左翼エスエル11人、無党派11人、ウルジュームではコムニスト7人、左翼エスエル13人から郡執行委が構成されていたが(Советы в эпоху Военного коммунизма. ч. 2, с. 393-394.)、これが同県での食糧活動の停滞と結び付けて論じられることはなかった。

(4) Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 43.

(5) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 43.

(6) Беркевич А. Указ. соч., с. 84-85.

(7) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 92.

(8) Изв. ВЦИК. 28 июня 1918.

(9) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, ЛЛ. 87, 92.

(10) Там же. ЛЛ. 98, 123.

(11) Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 47.

(12) Петроградская правда. 7 июля 1918.

(13) Беркевич А. Указ. соч., с. 87.

(14) Петроградская правда. 7 июля 1918. この時の部隊には何人かの失業者を含み、都市での大量の失業者の存在の下で失業者による部隊編成が奨励された。

(15) Правда. 25 июля 1918.

(16) ГАРФ. Ф. 130, Оп. 2, Д. 443, Л. 93.

(17) Быстрова А.С. Комитеты бедноты в Вятской губернии. Киров, 1956, с. 23-24. この大会について、特別全権は、大会の雰囲気はブルジョワ的で狭い視野である、布告の実施をモイセーエンコが妨げ、彼は郡の消費基準を引き上げたために郡はほとんど余剰を搬出することができなくなった、このような措置にわれわれは抵抗していると、ツェルーバに打電した (РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 246, ЛЛ. 134-134об.)。

(18) Изв. Наркомпрод. 1918, №10/11, с. 28.

- 19) Изв. Наркомпрод. 1918, №14/15, с. 47.
- 20) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 246, Л. 189.
- 21) Там же. Д. 205, ЛЛ. 141–141об. ヴィヤトカ県に派遣された部隊の質に関して、マルムイジュ郡で活動していた第1モスクワ食糧部隊について、指導官は、「それは満足にはほど遠い。訓練が不足し、組織を乱すまったく不適切な兵士である。選抜が必要である」と食糧人民委員部に報告した(там же. Оп. 3, Д. 160, Л. 108об.)。この連隊の兵士4人は市民から1500ルーブリを窃盗し、そのうちの1人は逮捕されずに逃亡した(ГАРФ. Ф. 393, Оп. 4, Д. 31, Л. 12)。
- 22) Изв. Уржумского исполкома. 1 окт. 1918.
- 23) ГАРФ. Ф. 393, Оп. 4, Д. 31, Л. 97.
- 24) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 99; Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 507, 508, 518.
- 25) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 205, Л. 122.
- 26) Изв. Наркомпрод. 1918, №10/11, с. 27.
- 27) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 522; Изв. Наркомпрод. 1918, №16/17, с. 44.
- 28) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 246, Л. 171.
- 29) Вятское нар. хоз-во. 1918, №1/2, с. 17. 7月13日の県食糧委会議でもこの問題が取り上げられ、デニーソフの行動の調査特別委員会が設置され、食糧活動の実権を事実上剥奪することが決議されたが(Вятское нар. хоз-во. 1918, №3, с. 22.)、彼の部隊による徴収活動は続けられた。別の指導官が、経験豊かな指導者がいない、時には職権濫用が行われ、デニーソフは何をするにも無力であると食糧人民委員部に報告した(РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 693об.) にもかかわらずである。
- 30) Там же. Л. 286.
- 31) Изв. Наркомпрод. 1918, №18/19, с. 46.
- 32) ГАРФ. Ф. 130, Оп. 2, Д. 443, Л. 186.
- 33) 食糧徴収軍本部委の命令により、第1モスクワ食糧連隊コミサール・ホマークが第1作戦食糧連隊コミサールに任命された(там же.)。
- 34) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 1, Д. 126, Л. 192.
- 35) この時の部隊の配置は, а, エラプガに食糧人民委員部全権デニーソフの指揮下のベルミ赤軍連隊215人, б, サラプル郡にラスポーポフ指揮下のベトログラード第1模範食糧連隊400人, в, ヴィヤツキエ=ポリャヌイに穀物徴収部隊300人, г, ソコルキ埠頭に100人, д, ツェボチキノ埠頭に200人, е, ヴィヤツキエ=ポリャヌイ埠頭に285人。このうち, в~еの部隊がトゥレク参謀本部の指導下にあった(Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 522; Изв. Наркомпрод. 1918, №16/17, с. 44.)。
- 36) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, ЛЛ. 284–285. グローバもトゥレクに部隊のセンターが設置されたと食糧人民委員部に打電した(там же. Л. 121.)。
- 37) Вятское нар. хоз-во. 1918, №1/2, с. 17. 8月8日の県食糧委会議でもトゥレクに参謀本部を設定するかの問題が提起され、この時もこの参謀本部は生産的でなく、全権シリーフチュエルが到着し、すべての食糧部隊がシリーフチュエルの管轄に移されるので、トゥレク参謀本部を解散することが決議された(Вятское нар. хоз-во. 1918, №4/5, с. 16.)。
- 38) Установление и упрочение Советской власти в Вятской губ. с. 521.
- 39) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 165. トウレクに到着した全権は、部隊が一致協力して活動していないことを確認し、食糧機関は独自に活動しているため、中央から食糧に関する独裁官の派遣を食糧人民委員部に要請した(там же. Оп. 1, Д. 246, Л. 171.)。
- 40) Там же. Оп. 3, Д. 160, ЛЛ. 485об.–486об.



- 41) ГАРФ. Ф. 130, Оп. 2, Д. 443, Л. 93.
- 42) Вятское нар. хоз-во. 1918, №3, с. 22.
- 43) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 306.
- 44) Изв. Наркомпрода. 1918, №18/19, с. 46.
- 45) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 346.
- 46) Там же. Л. 317.
- 47) Там же. Л. 349.
- 48) ГАРФ. Ф. 130, Оп. 2, Д. 443, Л. 176.
- 49) Там же. Л. 75; РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 494об.
- 50) Изв. Наркомпрода. 1918, №24/25, с. 57.
- 51) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, ЛЛ. 323, 693об.
- 52) ГАРФ. Ф. 130, Оп. 2, Д. 443, Л. 202.このほか、かつぎ屋の活発な活動のため穀物価格は春先の6-9ルーブリから20-60ルーブリにまで高騰していたクラゾフ郡で、7月10日から8月末までに5万9000ブード弱が食糧部隊の武装力の支援の下に14郷から徴収された(Вятское нар. хоз-во. 1918, №6/7, с. 35-36.)。
- 53) Изв. Наркомпрода. 1918, №16/17, с. 42. 次いでペンザ県の15万9000、オリョール県の13万5000ブードと続いた。
- 54) Северная коммуна: приб. 24 авг. 1918.
- 55) РГАЭ. Ф. 1943, Оп. 3, Д. 160, Л. 317. 部隊の調査のためにヴィヤトカ県に派遣された情報蒐集官 информатор は当時の現地の様子を次のように報告した。県食糧委で参謀本部はヴィヤトカからウルジュームに移ったことを知り、汽船で出発した。途中 [ヴィヤトカ河沿いの] レビヤジエで汽船は小さな匪賊団に捕らえられ、到着できなかった。全員が武装解除され、赤軍兵士は解放されたが、コミサールと情宣活動家は捕らえられ連行された。ウルジュームから12ヴェルスタに到着したがこれ以上進むのは危険なため、馬で引き返すことに決めた。近くの村には石版刷りで文法的にはまったくでたらめの、憲法議会の擁護を訴える檄があった。埠頭にも檄は貼られていた。レビヤジエからそこまでの途中で白衛軍の関所があり、尋問を受けた。そこから5-6ヴェルスタで再び白衛軍の偵察隊に遭遇した。野営地で明け方に機関銃と砲撃が聞かれたが、それはレビヤジエからソヴェト軍が匪賊を攻撃する音であった。こうして白衛軍の攻撃を逃れて、ようやく汽船に乗りコテリニチに到着した(ГАРФ. Ф. 1235, Оп. 93, Д. 170, ЛЛ. 41-41об.)。このようなヴィヤトカ県の軍事状況の下では、統一的な食糧活動は不可能であった。
- 56) Петроградская правда. 13 авг. 1918.